

に、発言なさった方と発言なさらなかった方から各一名ずつ、質問の形で見解を呈示して下さいようお願いした。これは本記録の末尾に掲載されている。

## 提題 トマスのイデア論と残された問題

山 田 晶

1. トマスのイデア論を理解するためには、その前提をなす神、創造、及び神の認識についてのトマスの所論を知らなければならない。

第一に、神について。トマスの神はエッセである。それは「がある存在」といったようなものではなく、すべての完全性を自らのうちに卓越せるあり方において包含している完全性の充満としてのエッセである。それは生命 *vivere* も知性認識 *intelligere* もその最も完全なあり方において包含している。すなわち神は、単に生きている、知性認識するというだけにとどまらず、まさにそのエッセがすなわちその生であり知性認識である。

神のエッセは純粹現実態 *actus purus* である。それは最もすぐれた仕方でも現実的活動においてある。神のはたらきは、自己のエッセを自己の外に溢出し、他者にエッセを与え、他者をしてエッセせしめることにおいてあらわれる。

神のエッセは無限である。神はそのエッセと区別され、そのエッセを限定する原理としてのエッセンチヤを持たない。神においてはそのエッセがすなわちエッセンチヤである。

2. 第二に、創造について。創造とは、上述の如く、神が自己のエッセを他者に与え、他者をして独立にこの世界にエッセせしめるはたらきである。しかし他者にエッセを与えるといっても、神からエッセを受ける以前に何らかの他者が既に存在していて、そのものが神からエッセを受けるのではない。神からエッセを受ける以前においては、他者なるものはこの世界に全然存在していなかったのであり、全く何もないところに、神はそのものの「全エッセ」*totum esse* を与えて、そのものをそのものとして存在せしめたのである。すなわち、無から創造したのである。

神が他者にエッセを与えるということは、神のエッセが自然必然的に神の外に流出することではない。神からエッセを受けて世界に存在するものは、無から創造されたものとして有限であり、エッセそのものなる神とは本質的に異なっている。それは神からエッセを受け、それによって現実存在するかぎりにおいて、神のエッセを分有しているといわれるが、その分有されたエッセは神のエッセそのものではない。神のエッセは無限であるが、神からエッセを受けてこの世界に存在するものにおけるエッセは有限である。そのエッセを有限にする限定原理が各事物に固有なエッセンチァである。

神のエッセと被造物のエッセとの間には分有の関係が成立している。それぞれの被造物は、それぞれの仕方では神のエッセを分有している。このことを神の側から考えてみると、神のエッセはそれぞれの被造物によってそれぞれの仕方では「分有されるエッセ」esse participabileである。神のエッセは無限であるから、それは無限に多様な仕方では分有されることが可能である。それはつまり、神が無限に多様なものを創造しようということに外ならない。しかしその無限なる創造可能性のなかから或るものを選び、これにエッセを与えて現実にエッセするものたらしめること、これは神の絶対に自由なる意志決定によるのである。

3. 第三に、神の認識について。神はエッセであり、また知性認識そのものであるから、神はたえざる現実的知性認識をしている。ところで神の認識対象としてふさわしいものは神自身以外にはない。その意味で神は御自身を認識対象とする。しかし神が神以外のものを何も知らないことはありえない。そこで神は神以外のもの（すなわち神にとっての他者）をいかにして認識するかという問題が生じる。これに対しトマスは答える。神は御自身を完全に認識する。しかるに何かを完全に認識する者は、単にそのものをそのものとして認識するのみならず、そのものがそれ以外のものによって分有されるあらゆる状態においても知悉するのでもなければならない。しかるに神のエッセは無限であり、それは他者A, B, C, …等々によって無限に多様な仕方では分有されることが可能である。それゆえ神のエッセは、Aとの関係においてこれをみれば「Aによって分有されるエッセ」であり、Bとの関係においてこれをみれば「Bによって分有されるエッセ」であり、以下、無限に多

くのものとの関係において、それぞれ同じことがいわれうる。しかもこのように無限に多くのものによって分有されうる神のエッセそのものは同一である。それゆえ神は神自身としての神のエッセを認識することにおいて、まさしくその認識が完全であるがゆえに、他者によって分有されうるあらゆる様態における御自身のエッセを認識する。これはすなわち、神があらゆる他者を認識することに外ならない。それゆえ神の認識対象がただ神のみであるということと、神が無限に多様な他者を認識するということとは決して矛盾しない。神はただ一つの御自身の認識において、ありとあらゆる一切のものを認識するのである。

4. アイデアについて。以上のことを前提した上ではじめて、トマスにおけるアイデアの意味は理解される。アイデアとは、トマスにおいては、他者によって分有されうるものとしてその他者との関係においてとらえられた神の自己認識に外ならない。したがってAによって分有されうるものとしてAとの関係においてとらえられた神の自己認識が「Aのアイデア」であり、以下B, C, …についても同じことがいわれる。したがって神のうちには、A, B, C, …無限に多様なアイデアが存することになる。しかもそれはすべて、神の完全な自己認識の内容に外ならず、それは一なる神の自己認識そのものなのであるから、神における諸事物のアイデアの多数性は、神の認識の単純性にいささかも矛盾しない。

5. アイデアと創造。—しかしながらこれらのアイデアは神のうちに「エッセしうるもの」*possibilia esse* としてあるのであって、必ずしもそのすべてが「実在の世界にエッセするもの」*entia in rerum natura* としてあるのではない。神のうちに「エッセしうるもの」としてあるアイデアを、現実の世界に「エッセするもの」たらしめるのは神の意志の自由決定であり、神が御自身のうちに存する無限に多様なアイデアの中から或るものを選び、これにエッセを与えて神の外に独立に存在する個物たらしめるはたらきが創造である。神のうちには「エッセしうるもの」についての無限に多様なアイデアが存在するが、そのうち神からエッセを受けてこの世界に存在せしめられるものは有限であり、したがってまた、かかるものの総体としての被造的世界は有限である。そして神のうちに有する無限に多様なアイデアのうち、いずれをとり

いずれをとらぬか。すなわち、いずれにエッセを与えいずれに与えないかということは、全く神の自由なる意志決定に依拠することであり、われわれはその理由を知ることができない。それは創造の神秘に属することである。

6. 個物のアイデアについて。かくて神におけるアイデアは「創造されうるもの」*creabile* のアイデアであり、創造されるのは第一義的に個物であるから、神のうちなる諸事物のアイデアは第一義的に「個物のアイデア」*ideae singularium* である、この点においてトマスのアイデア論は、アイデアを普遍的なるもののアイデアとしてとらえたプラトンのアイデア論と異なる。もっともトマスにおいても、単に個物のアイデアのみでなく普遍や形相や質料や、のみならず悪のアイデアというようなものまで考えられるのであるが、それらはすべて個物において、個物に即し、或いは個物との関連において考えられるものとして神の認識内容としてのアイデアであり、主要的なるアイデアは個物のアイデアである。ここで次の問題が生ずる。

7. 問題の第一。このように個物のアイデアはトマスのアイデア論の特色をなすものであるが、それについてトマスが語るところは不思議なことにきわめて僅かであって、ただ「個物のアイデアが措定されなければならない」*oportet nos singularium ponere ideas.* というだけである（『真理論』第3問8項主文。なお『スンマ』第1部15問3項異論解答3参照。そこで次の問題が生じてくる。何故トマスは個物のアイデアを措定しただけで、それについての議論をしていないのであろうか。

8. 問題の第二。更に次のことが問題となる。けだし神のうちに措定される事物のアイデアは、存在するその事物のエッセンチアの根拠であり、その事物のエッセンチアを根原的に規定する原理である。世界に存在する事物のそれぞれの有するエッセンチアは、神におけるその事物のアイデアに対応すると考えられる。事実、普遍のアイデアを措定したプラトンにとっては、事物のエッセンチアは当然また普遍的なものでなければならなかったのである。しかるにトマスにおいて、アイデアは第一義的に個物のアイデアである。とすれば、そのアイデアを根拠として創造される個物には、その「個物のアイデア」に対応する「個物のエッセンチア」が見出される筈である。し

かるにトマスはエッセンチアを普遍の次元にとどめて個のエッセンチアを措定しなかった。これは何故であろうか。

9. ドゥンス・スコトゥスとの関係と第三の問題。このようにみえてくると、トマスからドゥンス・スコトゥスへの移行には、少なくとも個物のエッセンチアの問題に関するかぎりにおいて、何らかの論理的必然性があるように思われてくる。スコトゥスは本質を普遍の次元にとどめず、更に徹底して個物の本質(ないし個的形相)を考えた。創造が個物の創造であり、創造の根拠として神のうちに個物のアイデアが見出されるとするならば(ここまでは上述の如く、トマスも認めている)、それに対応する個物のエッセンチアないし個的形相をそれぞれの個物において見出すというスコトゥスの思想はきわめて自然であり、それはトマスの思想に対立するどころか、その思想を延長してゆくとき、当然そこに到達すべき帰結であったとも考えられる。

しかしここで更に次の問題が生じてくる。個物のアイデアを措定したトマスが、そのような個的本質ないし形相の措定の可能性に思い知らなかったとは考えられない。もしもそうだとすれば、そのような可能性にもかかわらず、その方向に進まず、あえて彼がエッセンチアを普遍性の次元にとどめ、個の本質の主張にまで到らなかったのは何故であろうか。

この問題を追求するためには、われわれはスコトゥスとの対比において、トマスの所論を再検討する必要があるであろう。そのときトマスの個物論の真の独自性があらわにされてくるであろう。しかしこのシンポジウムにおいては、ただそれを問題として提起するにとどめておく。

---

**提題** プラトンの「分有」論からドゥンス・スコトゥスの  
「このもの性」論へ

井 上 忠

プラトンの「分有」論と一見類似する型の思想をドゥンス・スコトゥスのどこか